

アジア大会に参加して

瓜 田 吉 久

第10回アジア大会が、9月20日から10月5日まで、大韓民国ソウル特別市で開催された。私も陸上競技選手団の一員として大会に参加する機会を得たので、ここに、私の感じたアジア大会ということで報告したいと思う。

9月24日夜、既にアジア大会は始っていたが、我々陸上競技選手団は、試合日程の関係で少し遅れて成田空港を出発した。ソウルまでの飛行時間は、2時間10分と短く、日本国内の移動とさほど違いはなかったが、私には、韓国が依然遠い国の様に思われた。

金浦国際空港での歓迎は、韓国の抱えている多くの問題から起こる緊張を少しでも和らげようとするものようであった。その点からも、86年アジア大会から88年ソウルオリンピック大会へと続く二大イベントを成功させることは、これからの韓国の進む方向を左右するものとして、非常に重要な意味合いを持っているものと強く感じた。

24日夜9時頃金浦国際空港へ到着し、1時間30分程バスに揺られて選手村のあるソウル運動公園に到着したのは、11時を過ぎた頃と記憶している。この選手村は、アジア大会用として建築したもの(ソウルオリンピック大会用は別の場所に建築中)であり、大会終了後は、アパートとして完売済ということであった。その内部は、部屋数も多く広々

としており、日本円にしてもかなり高額なアパートになると言われていた。(この他、ソウルの町も至るところで物凄い建築ラッシュであり、韓国のアジア大会およびソウルオリンピック大会に対する熱意が感じられた。また、この二大イベントを通じて、世界の一流国家になろうとしていることも伺い知ることができた。)

私の部屋からは、選手村の中心部(食堂・娯楽施設・中央広場など)が一望できた。翌朝、晴れた青空の下、(日本と同様に韓国にも四季があるが、日本とは違い、この時期韓国では雨があまり降らないということであった。)中央広場では、朝早くから韓国の選手団が凄いい意気込みでトレーニングを行っていた。(私は、昨年ユニバーシアード神戸大会に参加する機会を得たが、その時も、同様な雰囲気を感じたことを記憶している。)この意気込の根源は、やはりメダルを獲得する事により、富と名誉が一日にして韓国選手に与えられることから生まれてくるものと思われた。例えば、女子中・長距離の三冠王になった林春愛選手は、その最たるものであろう。ここに今大会金メダル92個という史上例をみない大躍進を遂げた韓国の姿をみる事ができる。

転じて、私なりに日本の現状を考える時、一つには、経済的な豊かさによる生活の多様化、そして、そこから生まれる多数の娯楽の出現と、スポーツの趣味化から生ずるチャンピオンスポーツを中心とする人の減少と衰退が挙げられると思う。また二つめは、国あるいは一般国民のスポーツに対する価値観の低さが考えられる。スポーツは末だに他の文化に対する従属的なものとしての位置づけに



しか考えられていないのではなからうか。二つめの点に対して、もう少し付け加えたとしたならば、スポーツを趣味あるいは娯楽と考えている人にとっては、あくまでもチャンピオンスポーツを目指す選手の考え方は大きな隔りがあり、その隔りを少しでも無くして行くことが今一番大切なことではないかと考える。

さて、私の競技成績は、男子砲丸投で17m51と自己記録に僅かに1cmおよばず、銅メダルに終わったが、私にとっては、ユニバーシアード神戸大会（17m52・日本記録）に次ぐ国際的大試合であり、あの興奮の坩堝と化したスタジアムの中で、自己記録に近い記録を出せたことは満足のいくものであった。特に、男子砲丸投が3位以内に入賞したのは、10数年ぶりであり、近年、中国選手の台頭

が（男子砲丸投では、インド・クウェート等の選手が強く、今年アジア記録を中国選手に書き換えられる前は、10年以上にわたり、インドのパハドール・シン選手（今回は4位）がアジア記録を保持していた。）特に目覚ましく、上位入賞を果たすことは、大変困難な状態であった。

続いて、男子投てき種目（砲丸投・ハンマー投・槍投げ・円盤投げ）の試合結果を表1に示すが、メダル獲得数では、日本と中国の力は五角（女子（表2）では、投てき全種に中国が優勝している。）と見受けられる。しかし、内容的には、若干中国が優勢の様に思われた。次回92年アジア大会は、中国（北京市）での開催が決定しており、その点を考慮すると、4年後は更に中国の強化も進み日本は完全に中国に対抗できなくなるであろう。



表1 男子投てき種目順位（3位以内）

	1 位	2 位	3 位
ハンマー投	日本	中国	中国
槍 投	日本	韓国	韓国
円 盤 投	中国	日本	インド
砲 丸 投	中国	中国	日本

表2 女子投てき種目順位（3位以内）

	1 位	2 位	3 位
槍 投	中国	日本	韓国
円 盤 投	中国	中国	韓国
砲 丸 投	中国	中国	日本

この様な状況を肌で感じ、いかにして日本のスポーツを建て直していくか、今問われる時であり、その考えに立って、今回のアジア大会惨敗を契機に、効果的な強化を目指し日本体育協会も動き出したようであるが、今までも、この様な動きは何度となく繰り返されながら、何の効果もうみだされてはいなかったように思われる。今度こそ、実のある強化を行っていきけるような組織と体制を築くようお願いしたい。しかしながら、忘れていけないことは、トップスポーツ選手のみ強化だけではなく、スポーツに取り組む人の幅広い底辺の拡大と充実を計ってこそ強化はなし得るものと思われ、そのような意味からも、国あるいは国民は、競技団体や体協に任せきりになるのではなく、みずからの意識の改革と積極的なスポーツへの参加

を心掛けるべきであろう。

韓国国民がアジア大会によって知った民族の底力に対する自負と団結心は、続く88年ソウルオリンピック大会において最高潮に達すると思われるが、問題は、「オリンピック後」の韓国の進む道であり、その時こそ本当の韓国の力を見ることができらるであろう。それがまた、将来、日本を含むアジアの国々の進むべき道に少なからず影響を与えることは確かである。

最後に、第10回アジア大会のスタジアムは、ソウルオリンピックのためのスタジアムであったため感概もひとしおで、ぜひもう一度、あのスタジアムに立つことを目標に、2年後に向けて精一杯努力をして行きたいと思っている。

